

中川根ふる里通信

= 第21号 =

編集・発行・モリウツ中川根
 連絡先 〒428-03
 静岡県榛原郡中川根町
 上長尾859-6
 13.ふる里通信係
 郵便振替口座
 <名古屋> 7-81556



永川阿弥陀堂、あたたかい春の日ざしと
 桜花に包まれて

私のかわね考

静岡県立川根高等学校 鈴木文雄

すばらしきかわね

昨年の初冬であったが、島田市において教職員サッカー大会が開催され本校チームもそれに参加した。勿論私は応援団の一員であったが、試合中ふと夜空を見上げると(島田市民の皆さんには悪いが)星ひとつ無く薄暗くどんよりとっていた。試合も終り、皆でそばを食へ帰途についた。徳山の住宅近くで車を降り、夜空を見上げると、そこには望遠鏡めいた様な満天の星空があった。

春の桜、芽吹き、稚芽、夏の鮎、山女、水遊び、山登り、盆踊り、秋の紅葉、山の芋、満天の星、冬の猪鹿温泉、そして心暖かい人情、大自然と数え上げればきりがない程、かわねは魅力が一杯の土地である。

私達が大切にしなければならぬもの、現代人が求めているものが、かわねのそこそこにある。

かわねふる里支部を作ろう

元々かわねの住民で現在東京や大阪等の都会や下の市や町に住んでいる人も多いと聞く。どうして市や町に「かわねふる里支部」を作らない。ふる里通信や広報かわねの送付、郵便局や農協によるふる里の香り小包、川根町や中川根町が行っているマラソン大会への参加要請、ふる里支部大集合バーベキュー大会を開催してもおもしろい。

定住者でなくても「親かわね住民」になってもうちは良い、こういふことを推進する課(係)を

町役場の中に設置するのも一考であろう。そうした中でUターンの可能性も生じてくる。

Uターンしませんか

かわねの中の中川根町を考えてみる。同町より現在下の町へ車で約五分かかる。道路を整備し、トンネルを掘れば三分も夢ではない。国道一号線までの時間が短縮されれば東は静岡、西は浜松が通勤圏内になる。自然環境に恵まれたこのかわねの地は、住宅地としても最適であり、又その用地は十分ある。

道路が良くなれば自然と共存した工場や研究所の誘地もおおいに可能になる。工場の製品も従来の重厚長大(トン)から軽薄短小(トン)の時代に変わりつつある。即ちこれからの工場は、林や林の中に見え隠れするような用地で良いということであり、地元での働き場所は確保できる。通信回線を使えば、かわねに居下りにして例えは東京での

仕事が出来るとき代がもうそこまで来ているし、又今、都会では家族は子育てに良い田舎において月曜日から金曜日までは会社に勤務するといふ逆単身赴任現象が起っている。

かわねの町の中の食堂等に「Uターン呼びかけよう支部」を作り、そこを若者が集まる所(現代版若衆宿)とし、若者の熱気によって、ロコミでUターンの輪を拡げることでもできよう。



徳山川根高校横沢まの
桜並木



ハナミズキ

今、かわねが黄色信号である

朝のテレビを見ていた。今から十数年前、ある山奥の小学校の分校が在校生がなく廃校の運命となった。しかし住人の一人が「今は確かに子供はいないが、うちには息子がいる。必ず嫁さんをもらい子供を生んでもうい新入生を作るから廃校ではなく休校にしてほしい」と訴えた。

めでたく新入生もでき再開校日が今朝であった。笑みいっぱいの人々の顔がブライウイングにあった。

人口の減少(十年前の十三%減)、高齢化(七五%は時間の問題)、公的機関の閉鎖、川根高校の生徒の減少、茶業や林業の後継者問題等暗い材料も残念ながが多い。

しかし、皆で異知を出し合えば道は開けてくるものと思う。

この為には住民一人ひとりがしっかりと自分の足元を見つめ直すこととあり、何んとしてでも諸先輩の築きあげたかわねを継承し、発展させる若い血を何らかの形でこのかわねの地に踏み止まらせたい。又、その為にも若者にとって、魅力ある土地にしたい。

かわねは大自然と歴史と、高校があり、鉄道が通っている町である。自信と誇りを持ちたい。

幸せとは何か

幸せとは何か。お金があって、人より良い家に住んで、おいしい料理を食べて、着飾って、時々旅行に行けることであろうか。

しかし以上挙げたことは現在ではほとんどの日本人が手にしていることであろう。しかし満足感がない。これらも大事なことに違いないが、真の幸せとはもっと他のところにあるように私には思える。

都会のマンションで、ひとつ壁を隔てた三口間向うの家庭は赤の他人。どんな人が住んでいるかも知らない。ましてや話はおろか、あ

いさつとしたことがない。これではいくら物質的に恵まれ、いわゆる文化的な生活をしていても心は満たされない。

大会社はよくて、中小企業はその次であるという考え方がある。確かに安定性や給料をはじめとする保障に関しては、大会社の方が一歩先んじているであろう。しかし会社が大きいということは、逆に考えれば個人はひとつの小さな歯車にすぎないということでもある。極論すれば大きな流れの中で全体を見ることなくひとつのほんの小さな部分を型通りの仕事をして、生涯を終えることにもなりかねない。

都会というのはそんなに魅力があり、すばらしいところなのであろうか。私的な体験であるが、昨年の五月東京において研究会があり、友人と共に参加した。一泊二日であったが第二日午前中に閉会となった。折角出された弁当をおいしく食べようと近くのお寺の境内で食べた。二人で会話をかわしつつ食事をしていたところ、遠くに住蔵さんの姿が見えたので、「これはひょっとしたら食事をしている私達を見つけ、お茶でも持って来てくれるのかな」と内心期待した。

ところが近くに来た住蔵さんは、つかつかと私達に近よるなり「ここで食事をしてもらってはこまる。」と言われ「すいません、もうすぐ終りますから。」という顔色を変え、警察を呼ばんばかりの勢いであった。

私達は早々にその場を退散したが何か寒々としたものがいつまでも残った――

ジシバリの花



ふる里の建物

水川 阿弥陀堂

中川根町指定有形文化財

(表紙も合わせご覧ください)

水川地区のは、中央、国道の山手に桜やいちじくなどの木々に囲まれた美しいお堂が建っております。水川阿弥陀堂と言ひ、古い歴史があります。

このお堂は、天文五年(一五三六)に創建され、天保九年(一八三八)再建されたと言われている。棟札によると

丙(なま)天保七年 遠州榛原郡志呂庄家山郷水川村
本再建阿弥陀堂 願主 中村藤五郎
暦十二月十五日 大工 黒川喜右工門

間口三間三尺 奥行三間三尺 こじんまりとした建前で、左右の廊下のつき当りに



縦一六〇cm 横七二cmの一枚板に獅子、周囲の欄間や壁などに数多くの精巧な彫刻が施されておあり、内部の天井には、中心に亀、周囲には化鳥が描かれ、欄間には天女の姿が色彩豊かに描かれております。江戸時代末期の三間堂としての様式を残している近江にない美しいお堂です。

このお堂の施主であった水

川村名主中村藤五郎は、お堂再建のころは近郷近在の茶を一手に集め、江戸の茶問屋山本嘉兵衛(今の山本山)と取引を行うほどの川根地方屈指の豪商であった。

伝説によると、天保五年(一八三四)二月江戸に大火があり、山本山も災難に合い、焼け残った倉の中から阿弥陀如来の仏像一体が発見されました。後日、江戸に上った中村藤五郎(中藤さん)が当主からこの仏像を譲り受け、これを勧請して今のお堂を再建したといわれています。この再建のためには、中藤さんをはじめ、近郷の村人達は、金百両を拠出しています。

当時は、いわゆる天保の飢饉で全国的に食料が不足していました。川根地



左廊下つき当り、親獅子が子獅子を淹に突落として、昇はって登るのを見ている様子を描いてい

方も例外ではなく、再建には大きな支障がありました。中藤さんはじめ信仰の厚い村人の熱意、川根、駿府、江戸の商人達の協力があって困難をのりこえ、完成されたといわれています。天保九年九月と記された文書に、江戸日本橋茶問屋山本嘉兵衛から金十両、石手小鉢、花瓶壹対、花籠等が寄進されたと言われています。

明治初年同家が村外へ出られたことから、祭儀や管理が水川区にまかされ、毎年旧正月一日を祭日にして、祈願法要が行われていました。又同所は智満寺の葬地境内となっていました。

再建より昭和中期まで、カヤぶきでいたが、現在瓦ぶきとなっております。長年の風雨で、だいぶいたんでおります。町の財産として、守ってほしいものです。



世界青少年音楽祭開催に

尽力されている

木津 文彦さん

(高郷出身・浜松市在住)

静岡大学から東京芸大(器楽専攻)に進み、ピアノを勉強した。昭和二十九年から静岡大教育学部音楽科で音楽教育を教え、現在同科と大学院の教授、全国教育大学音楽部門副会長、浜松市生涯教育推進協議会委員などを務めています。

世界青少年音楽祭の構想は二年前から計画しておられた。(準備会委員長)「浜松市が進める音楽の街づくりは、二十一世紀に生きる子供たちが担うことになるので、若い世代に音楽に関心をもってもらいたかった。各国青少年との交流は、国際理解にもつながる」。音楽祭に招く各国合唱団との交渉を一手に引き受けられた。

「合唱曲の作曲や合唱団の海外遠征で知り合った友人や指揮者が多かったので、電話や手紙で参加を要請しました。国によっては渡航費用ねん出に苦労したところもあったようですが、各演奏団体とも浜松での演奏を楽しみにしているようで、快く応じてくれました」。

参加は日本を含め九カ国十三団体となりました。「海外演奏や各種音楽祭で高い評価を受けている有名合唱団ばかりで、これだけの合唱団が一堂に集まるのは国内では初めて、他の音楽関係者からうらやましがられています。こういう機会に世界の素晴らしい音楽を市民に聴いてもらいたい」。

音楽祭は七月二十六日から二十八日までの三日間。「コンサートは市民会館で行いますが、フルテでオーブニングセレモニー

世界の素晴らしい音楽 聴いて

や世界合唱セミナーなども計画しています。そのほか、小・中学校への親善訪問や、市民を交えての納涼大会も予定しています。コンサートでは各国が特色を生かした民謡なども歌ってくれると思います」。浜松市内を中心に作曲した校歌は百曲以上にのぼっています。

平成三年三月六日付 静岡新聞「この人」より



もう10年位前になりますか。ハンガリーのゲーテンベルグ女声合唱団を木津先生が中川根中学校へつれて来て下さいました。すぐの様に登壇した合唱が、想い出されます。木津先生がふる里を想って作曲された「白い木蓮の記憶」も――。

あわや 集団自決……



昭和二十年八月九日未明、ソ連軍は日ソ中立条約を無視して満州に侵攻した。迎撃しようとする関東軍はすでに主力を南方戦線に取られて実体は無く朝鮮付近まで撤退して、その南側だけを守る方針をひそかに決めていた。開拓国の大半は、頼みの関東軍から見捨てられた。

静岡県からの最初の移住として満州に渡った東安省の哈達河開拓団(他県との混成。本県出身者は三十五人)では、避難途中の八月十二日、ソ連国境に近い麻山で、ソ連軍に包囲され、婦女子四百数十人が自決した。団の中心だった青壮年を召集で取られ老人と婦人、子供ばかりになった開拓団はソ連軍だけでなく、中国人農民からも襲撃された。『五族協和』の美名の下で、中国人の土地に入り込んだ結果だった。

約二十七八人の満州開拓民のうち、一百一十五人が戦死または自決、六百七十八人が病死したとされる。置き去りにされた子供たちは中国戦犯として今もなお暗いかげを照らしている。



関東軍が見捨てる

八月十一日夜川根開拓団の池田ヒデさん(高郷)は、雨が降ってきたのを見て燃料用のアシを取り込み、家の外に出た。その時、やみの中から馬に乗った若者が現れた。隣に住む諸田平吉団長(代理の家に来た県公署(西役場)からの連絡係)だった。「先生、起きて下さい、緊急連絡です。鎮東県が戦場になります。女性、子供を連れて逃げて下さい。」避難命令だった。

ソ連の参戦と同時に、北隣の駿府郡開拓団は新京

特集 満州移民 その4



への避難を決めた。しかし浜松郡開拓団は、残留の方針を固めていた。川根開拓団では避難と残留の両論が団員の間でぶつかり、どちらとも決められずいた時だった。

池田さんは慌てて避難準備を始めた。夫は二週間前に応召、三歳の息子と二人きりだった。保存食として大豆をいり、モンペの破れを繕った。かたわらでは、息子が何事も知らずにスヤスヤと寝息をたてている。「どこまで逃げられるだろうか、どこで殺されるのか」と心細さでいっぱいになった。

開拓団内部の連絡も崩壊しかかっていた。翌十二日には、つても避難命令を知らない者や、居残りを主張する団員がいた。最終的に新京へ避難することと一致したのは、八月十四日だった。団員たちは開拓団内で最も鉄道に近い後八各乃の集落に集まった。出発直前、浜松郷の団員が重火器一式をもちこんだ。「駿府郷にソ連軍が攻め込んだ。三人が戦死した。もう完全なデマをわかったのは彼の話で、団員たちはパニックに陥った。「もう逃げられない、そろって自決しよう」。理性を失った団員たちは、たちまち集団自決に傾いた。「それならば、いちばん景色のきれいな集落で死のう」と引き返す者もいた。

このとき、前年に応召した板谷壮吉団長の妻せつさん(水川)の一言がなければ、川根開拓団もまた悲惨な最期を遂げていたかもしれない。「まだソ連が来るかどうか、わからないしやありませんか。とにかく、逃げられるところまで逃げましょう。それからでも死ぬのは遅くありません。」せつさんにそう言わせたとのは、団長の

救った婦人の一言「逃げられる所まで」

荷を捨て、鉄橋を渡り

途中で“敗戦”を知る

妻として、団員たちを犬死にさせてはならない、という思いだった。気を取り直した川根の人たちは昼すぎ、約三キロ東の新京(長春)を目指して出発した。入植以来三年四カ月がたっていた。八月十四日は暑い一日だった。生まれたばかりの乳飲み子を背負った婦人や、老人を抱え、無事に目的地までたどり着けるのか。だれも自信はなかった。

無傷の脱出行

男たちはありったけの荷物を馬車に積み、女たちは子供の手をしっかりと握り締めた。線路つたいに東へ。青少年義勇軍出身の青年たちが、旧式の銃を持って周りを固めた。

線路沿いには、中国人が開拓団をじっと見ていた。手に鎌を持つ者もいた。陰悪な空気だった。それでも、川根の人たちは、他の開拓団のように襲撃を受けることはなかった。現地の人たちと比較的、友好関係にあったからかも知れない。

当時十四歳だった植原忠一さん(故人)一家は、親しくしていた中国人農夫のクーさんに馬車を貸してもらった。クーさんは入植地の東を流れる洮兒河まで見送ってくれた。「地雷に気をつけなさい」と何度も注意してくれた。

洮兒河は数日前の雨で水かさが増え、濁流が渦巻いていた。約二百メートルの鉄橋は、線路よりわずかに広い幅しかなかった。団員たちはレールの間に渡された細い板の上を恐る恐る歩いた。馬車はとも通れなかった。強引に渡ろうとして、馬がまぐら木の間、脚をはさんだ。団員たちは立ち往生した馬を、泣く泣く川に押し落として進んだ。荷物はほとんど放棄

600人 新京まで 300^{km}

しなればならなかった。

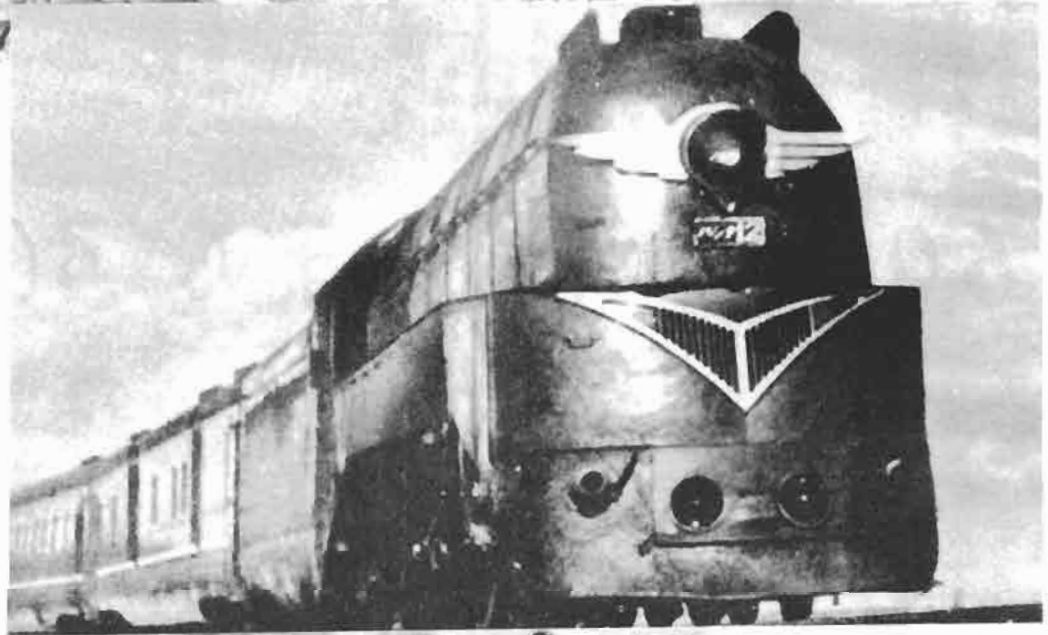
日はすでに地平線に沈みかけていた。新京までの道のりを考えると、団員たちの足取りは重かった。疲れて落後しかかる者も出た。そんなときだった。前方から一両のトロツコがやってきた。トロツコには日本の兵隊が数人乗っていた。兵隊は日の丸の小旗を振りながら、「合力の駅までがんばれ、救援列車が来るぞ」と言って通り過ぎた。合力も、同じ満鉄新京白線の駅だ。開拓団の入植地にあった京白線到保信号所から約二十キロの東隣だった。もう少しがんばれば助かる。団員たちの足取りは自然に軽くなった。

その夜、川根開拓団は合力駅で一足早く避難した駿府郡開拓団と合流した。救援列車に乗り、翌十五日、前郭旗駅に到着し、そこで敗戦を知った。太陽がやや西に傾きかけたころ、駿府郡開拓団の国民学校の教員が十両ばかりの貨車を一両ずつ回り、敗戦の詔勅を読み上げた。団員たちは「ただぼうぜんと聞いた。十四歳だった沢井公明さん(久野脇)は、『爆弾で全員自決する』といううわさを聞いた。怖くはなかったが、『いま死ぬのはいやだ』と思った。駅ホームに目をやると、日本の兵隊が銃にもたれてボロボロと涙を流していた。

二日後、約六百人の川根開拓団員は、駿府郡、浜松郷の団員らとともに新京に着いた。途中の犠牲者は一人もなかった。

敗戦前後の混乱のなかで、川根開拓団のように、無傷で入植地を脱出できたのは、きわめてまれな例である。同じ鎮東東に入植した磐田郡福田町送出の竜山開拓団は、川根開拓団よりもわずかに二日、脱出が遅れた。現地の中国人の襲撃を受け、死傷者を出しながら逃避行を続けた。竜山開拓団が、最終的に新京の南の公主嶺に着いたのは、九月一日のことだった。

昭和六十年二月朝日新聞、静岡地方版発行
 “静岡の戦争”「もう一つの中川根村」より
 次回号に続きます。内容は難民生活など。



「あしあ」と称はれたこの快速列車は昭和九年にお目みえした流線型、平均時速八三キロで大連、哈爾濱間を暴走した。技術は日本人の手で材料は全部満州産。



私の戦争

地名

サ滕田正義



私が入営したのは、昭和十八年一月十日、厳寒の最中、ソ連、満州国境に近いハイラルの国境守備隊でした。今から五十年近い前の事です。

部隊入口にある衛門の所に、「唯今の温度」という表示板があって、零下四十二度を指しておりました。私は昭和十三年から新京(長春)に在住していましたが、少々寒さには驚きませんでした。これには、やはり地の涯に来たのだとの感を深くしました。

国境守備隊は歩兵、砲兵、工兵から成る兵団で、私は歩兵六中队に同年兵四十名と共に配属となりました。全部は満州の居住者でしたので、出身地は北海道から鹿児島まで全国に亘っており、中隊で静岡県出身は人事係の鈴木准尉と二人だけでした。

入営最初の夕飯は、赤飯に属頭付きの魚、キントンが出て歓迎してくれ、先輩の兵隊は、とても優しく、親切に今後の生活について指導してくれました。一夜明けると、それは鬼に変身していました。この時一番感じた事は、「二歳、か、年令の差のない先輩が、單服が板について、五六歳も年上に見えた事でした。翌日、墓場と称した陣地につれて行かれ、トーナカの入口の鉄扉を明け、地下道を行くと、機関銃座、砲座があり、銃眼からはハイラルの街、鉄道が見渡せ、更に深い所に入ると、六畳位の部屋になって、銃下には私の名前も記してありました。二日目には四年兵の入達が満期除隊で岐阜の原隊に帰って行き、いよいよ長い間、苦業を共にする同年兵、二年兵、三年兵との生活が始まり、三年兵は関東、二年兵は九州の出身で、言葉の微妙な異に、とまどう事もありました。例えは九州出身者は、こちらに「よこせ」という事を「やれ」と言うなど……。

一ヶ月位たってから、仲間の同年兵が内地から各中队二十名ずつ入って、ようやく六十名全員が揃いました。同年兵は、連隊砲、大隊砲、速射砲

機関銃、小銃とに分業され、激しい訓練が連日続きました。私は重機関銃でした。中隊には重機関銃が二十四門もあって、手入れが大変だった事を覚えていきます。

内務班(兵営内)の生活は厳しくて、くつろぐひまはありません。初年兵は二十名ずつ一班から三班までに入り、それぞれ班長、初年兵係がついて教育に当り、四五六班は二三年兵で構成されていました。暖かい静岡県では想像もつきませんが、便所には太い檜が置いてあり、この檜で凍って岩のように固くなって、盛り上った大便をくずして平にするのです。ここの匂いと尻につかえます。凍っていますので、臭気はありませんが、服が散った破片が服について、内務班に来ると、それが解けて臭くなって閉口しました。小便の方は、スコップで氷をすくい出し、裏の穴へ捨てていました。一期、二期の検閲が過ぎると、同年兵は衛生カス、暗号、ラッパ、無線、有線、銃工、縫工、経理、下士官、志願者、幹部候補生等に分かれました。何も無い私は、衛兵勤務が多く、一月の内十日位は勤務につきました。部隊司令部は一日勤務でしたが、北松山陣地、前進陣地、一〇二号陣地は一週間の勤務でした。



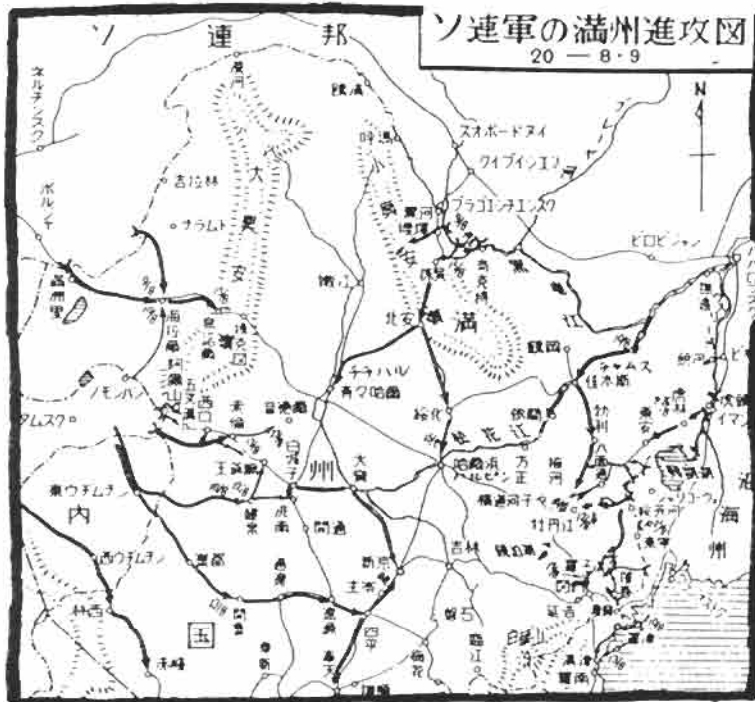
厳寒の北国境に立つ監視哨

翌十九年二月に待望の初年兵が入って始めて後輩ができ、私も上等兵になり初年兵の教育に当りました。この年から戦況が急迫して来たのが、北満にいても感ずるようになり、中隊からも北支へ南支へ、南方へと戦友が二人、三人と転属して行き、秋になると、ハイルに居いた二十三師団が南方に転属され、その跡へ私連の国境守備隊が二九師団と入れ替わりました。私は歩兵二五四連隊、機関銃中隊となりました。翌二十年四月鉄道連隊に転属してハルビンに、七月には牡丹江に移り、ここでも初年兵の教育係でいたが、初年兵の半分は朝鮮人でした。

八月八日夜の空襲でソ連の参戦を知り、翌九日、中隊は佳木斯にある松花江の鉄橋爆破の命令を受け、爆薬を貨車に積んで出発、途中林口駅で数回空襲を受けました。負傷者一名と言う被害です。目的地佳木斯に途中行き違う列車はいずれも奥地より、引揚、避難する人達が多勢集っており、客車の屋根には機関銃掃射による弾痕が生々しく、在戦場の感を深くしました。

昭和七年第一次の武装移民が入植した琿春、千振の駅では、開拓団の人達が、大勢駅に集合していましたが、壮青年の男子は単に徴集されて、老人と女子供ばかりで、家に帰れば食糧はあるが、暴徒が多くて戻れないので、「兵隊さん、米があつたら分けて下さい」と代表の方が言われた。中隊長に相談すると、「今後の食糧の供給もどうなるか判らないので、米の毒だか断れ」と言うので、隊長の目を盗んで米を何俵か却したが、今思えば、悪い事をしたと自ら慰めています。

目的地の佳木斯の鉄橋へは、九日晚到着し、鉄橋の三ヶ所に爆薬を突っ込んで橋の整備につきました。



・目的地佳木斯に途中行き違う列車はいずれも奥地より、引揚、避難する人達が多勢集っており、客車の屋根には機関銃掃射による弾痕が生々しく、在戦場の感を深くしました。

最後の日本軍が撤退した後、爆破の予定でした。この時期雨が多く河は増水していました。ここに十三日の昼頃までいましたが、佳木斯から緩化へ通ずる鉄道が水害のため不通になっていたから、その復旧工事をして横道河子まで下れとの命令が出たので、鉄橋爆破は特務機関の方に申し送り、その晩緩化（ハルビンの北）に向って出発しました。

途中水害箇所を復旧しながら、十四日晚、緩化に到着、十五日に天皇陛下の重大放送があるから分隊長以上は集合との事で、緩化駅にある鉄道管理所でラジオ放送を聞きまわった。雑音が多く、ハッキリ聞き取れませんでした。内容から推して、敗戦による終戦らしい事はわかりました。

茫然自失と言った心境で、ふと気がつくと、街の中国人の家々に赤旗がひらひらと翻っています。一体これからどうなるのか、どうしようもない。戦争は終わったと言っている。とが交錯して不思議な気持ちになった事を覚えています。

中隊で今後について相談した結果、幸い列車を持っているし、兵器食糧もある。ので釜山を目指そうと言う意見も出ましたが、最初の命令通り横道河子の連隊と合流することに決まり、ハルビン経由で十六日横道河子に到着しました。

当時、ここには多くの日本軍が集結しており、十九日を期して、武装解除と言う情報が入り、再び中隊で今後について相談した結果、「出来るだけ南下しよう」と言う事になり、十八日夜列車を運転して横道河子を離れた。

十九日ハルビン(南下のための経由)に着いてから、駅は既にソ連軍の管理下にある。私達の列車は身動き出来ません。街の治安はソ連軍の本隊はまだ入っておりませんでした。中国人の保安隊が日本軍から押収した銃を持って街や主要建築物の警戒に当たっていました。私達も武装していました。手は出さず、来ませんでした。

ここで朝鮮人の兵隊は、持てるだけの食糧、銃、弾薬を渡して、除隊させ残りは日本人だけにとりました。この夜、ソ連軍の大部隊が南下し、ハルビンにも入って来ました。

二十日駅に、副長が降参され、ソ連軍の捕虜となり完全に自由は奪われて以後、すべてソ連兵の指示に従う事になりました。

ハルビンからソ連兵監視のもと、ソ連兵隊が一週間ばかりは丹江口まで、手前が海杯に着きました。途中、ずいぶん奥地からの引揚邦人に出会い、また「論徒歩」がどうする事も出来ません。顔も黒く、汚い。娘さん、幼虎を背負った母親、端々が歩む老人達、皆んなやつれて、悲しい表情なものでした。二十日前には家族揃って、平和な家庭が、戦争と敗戦の悲劇をこの時ほど感じた事はありませんでした。

海杯では日本軍の物資を戦利品としてソ連への積込作業に従事させられました。五口人の大隊を編成して、元日本軍の倉庫が宿舍となっていました。

忘れもしない十月十五日の十一時三十分頃です。火事だ、と叫ぶ声に、宿舍を見ると、白い煙が吹き出しています。丁度この日は暖かかったので、上着類はすべて脱ぎ、作業をしていたので、すぐ衣服を取り出さねば、これから冬を迎えてしまうだろう。との忠告が湧いて、一般に宿舍に向って走りまわったが、既におそく、火は宿舍全体を包んでいます。

出入口は保温のため、はめて三尺位しかなく、近くで作業をしていた人達が、大勢私物を取りに入るので、出入口付近で折重になって倒れました。

火の廻りも早く、お互いつっかりして、「落着け」と叫びながら、傍の鉄パイプを渡しても、それをつかんだまま、つぎつぎに倒れていき、中にいた人達も脱出できず、六十数名の方が、みずく焼死してしまいました。現場では二、三日、人の焼ける臭が充満していました。

この事件のため私達の大隊は、シベリヤ行きを免れ、十一月三日ハルビンで解散されましたが、これからは異国と化した地で、自分で衣食住を求めなければなりません。私は多少中国語も出来たので、秋田出身の今野さんと二人で、ハルビンの床屋さんで住み込みで働く事になりました。店の掃除、水汲み、バーマ洗滌後のドライヤー掛けが主な仕事です。最悪の生活でしたが、兎に角、食住はこれで保障された訳です。こうして終戦の年の冬を越えました。その後、中国の新聞で、ある程度日本の事情も判り、日本人が送還される事を判り、うなづいた。このままではどうにもなりません。床屋の主人から支給された黒い中国服一枚では祖国に帰れません。そこで、お世話になった床屋の人達には悪いけれど、もうひと金になる仕事をさかす事になりました。丁度街はずれの精米店で従業員を募集していたので、二十一年の二月から首尾よく、そこへ住み込みで働く事が出来、また今野さんも近所の精米店に入る事が出来、先ずは一安心することができました。

ここでは、従業員は四人でしたが、専門の料理人がいて、食べ物は今考えても、ワロリーの高い栄養のあるものでした。燃料はふんだんにある糠を使っています。精米店兼卸店だけあって、米、小麦、包米、大豆、高粱、等何でもあり、日本人だからと、私には特別に米を炊いてくれましたが、毎日では悪いので、店の人と同じ饅頭(小麦粉のふかしパン)で中国人には米以上に好まれるようになっていました。

この主人は小説が好きで、三国志、劉備、玄德、関羽、張飛、孔明など漢字で書くと「お前知っているのか」と大変よろこんでくれました。待遇も外の中国人と同じで、約束通りの賃金もくれ、一生懸命働いたので、事にしてくれて、当時の日本人としてはむしろ恵まれていたのかも知れません。

ある休日ハルピンの街へ日本人の様子を見に出ると、街頭で「おい藤田ではないか」と私の名を呼ぶ声がしました。振り返ると、ハイラルの部隊にいた時中隊は異ります。自動車の運転をしていた同年兵の北田君でした。そこで近況を聞くと「兵隊仲間六人で一部屋借りて生活している。近く日本に帰れそうだからお前もこい」と言ってくれます。私も今の生活にはまあ満足しているが、いつまでも続ける訳にはいかないし、主人も良い人だしどうしよう、と考えました。いずれ三日後に返事をすることを一応は北田君とは別れました。

この当時ハルピンの街には在留の日本人が大勢街角に立って、竹の子生活の必需品を売つては生活を送っていました。私も古洋服と一しに、鶴見祐輔著の「最後の舞踏」と言う本を買って帰り、読んでみると、主人の甥に当たる王さんが「今夜から夜勤だから本を読むのは止めて寝ろ」と言つて本を取り上げてしまいました。普段は仲の良い王さんでしたが、この時は突如に王さんと喧嘩して、これを口実に精米店を出ようと決心すると思ひ切つて王さんとなぐりました。彼も突然の私の行動に驚きまして二人で組合の喧嘩になり、これを見た主人が急いで仲に入り直した。私はもう彼といっしょに居るのは嫌だ。と言つて強引に精米店をやめさせてもらいました。

そこで主人もやむなく、これまでの資金も精算してくれ、当時貴重品だった布団も、お前の分として買ったものだから、と言つて持たせてくれました。全財産を天秤棒に付けて、戦友の借りている部屋に入り共同生活を始めました。この時は二十一年の七月に入っていました。

以後、約四月兵隊仲間七人での生活は、井戸張り、練瓦作り、サンドウツチマン、葬式の旗持ちなど何でもやって故国へ帰る日を待ちました。こうして、国共戦争の最中、十月末内地の土を踏み事かてきました。



あとがき

勇ましい武勇伝は何もありません。むしろみじめな敗残兵の生活記録と言つた方が正確かも知れません。

ただ、今後の日本人が絶体に経験する事のない生きざまである事は間違ひありません。

お世話になった中国の人達にお礼を思っておりますが、当時五六十歳でしたので、恐らくお合ひ出来ないうと思案しているのが現在の心境です。国の方針が一歩誤ると国民大衆こそ、その犠牲の最たる者であると言う事実はひとり銭が国ばかりでなく、今度の遼東戦争を見て明らかです。

今日私達が享受している平和は過去の尊い犠牲の許に王れものである。との事を今一度振り返つて見たいものだと思ひます。文中、何分にも五十年前の以前の事ですので、日時等若干の記憶違いがあるかも知れませんが、お許し下さい。



哈爾濱 (ハルビン)

雙龍旗、赤旗、五色旗、青天白日旗、滿州国旗と、この街に輝いた旗の変遷は、国と民族の興亡の歴史だ。街はロシア人が建設した異色の街、30数万人が住んでいた「国際都市」だ。

ムラのあゆみ

下泉 松下麟一

千年一昔といいますが、千年ともなると、小さな集落や村でも、すい分いろいろの出来事があります。

これは旧下泉村および町村制がいかれてからの徳山村を中心にして出来事を公的文書に従って年代順に並べたものです。

出典の主なものは、勝山守正家文書、椎野龜治家文書、中川根町史資料編、徳山村誌、静岡県茶業史、榛原郡神社史などです。神社史には異説もありますが、他に信頼できる史書が見当たらないので、そのまま用いました。

「あゆみ」を通過して、まず気が付くことは、各集落の神社の創建がかなり古く、八〇〇〜一六〇〇年代には殆どの集落に神社ができ、住民のよりどころになっていたことがわかります。

「大間検地帳」や「宗門人別御改帳」もいくつかの集落に残っており、室町時代末期には、封建的郷村制が成立していたようです。

封建社会の代表的な悪政の一つである「助郷」も何回も登場します。「助郷」制度は、江戸時代に大名が参勤交代するときや、朝鮮使節を送迎するとき、これらの行列に必要な人夫をそろえるための、宿場を中心に、出役を課した制度で、当地は宿場から遠いため「定助郷」はまぬがれたものの、臨時の「大助郷」には、村人が大動員されました。

正徳元年（一七一〇）九月の朝鮮使節通過のときは、大井川西岸だけでも九七〇人が動員され、下泉村からも三三人が出役しています。助郷制度の負担量は次第に増え、ムラの財政や住民の生活を圧迫し、天保飢饉の際にはついに耐えられず、減免願

を出しています。

年貢もきびしく、又茶園の凍霜害、風水害など天災も毎年のように発生しています。

下泉村で初めて植林したのは一八四六年で、一八四九年には山林の譲渡が始まっています。

いまの農協の前身の産業組合も明治から大正にかけて各集落に設置され、これも早い取り組みでした。

おムラのあゆみを年表でまとめて下さってありますので、今回より続き編で載せさせていたたきます。以後三回位「貴重な資料ですので、保存されておいてはとおすすめします。なお年表上、同年代附近の国内、国際上の事は（一）書きと、なっております。次ページをご覧ください。



上、横郷方面、河内川河口付近道路より、下泉を望む
下、下長尾TV中継所東側より、大井川下泉地区（橋）遠望



左頁より続く

※ 宝永元年以降は 2 回へ続きます。

明暦3年	1657	下泉村の年貢、 ^{57石} 銀 92 貫 15 文	眉山
寛文6年	1665	徳山浅間神社 現在地に遷座 (^{1666年} 箱根(深谷)用水工事着手、大庭源三郎、友野右衛門)	郡神 社史
・ 10年	1670	地名村五人組 名簿作成	推野
延宝4年	1676	下泉村の百姓林 21 枚 所有者 15人	眉山
天和元年	1681	川根23ヶ村庄屋連名で年貢換算率更正等陳情 (1680年綱吉将軍となる)	・
貞享4年	1687	下泉村犬 御政書上 4 匹 (生類憐みの令発す)	・
元禄2年	1689	下泉村五人組名簿 (13 組) 鹿の事故について念書	・
・ 3年	1690	下泉村の田畑水害、茶の木枯死につき 減免願	・
・ 6年	1693	下泉村のおとし鉄砲 11丁 (1696年、富田・金谷両宿に川会所を設置)	・
・ 11年	1698	下泉村の年貢、米3石 87合、 ^{57石} 銀 102 貫 91 文	・
・ "	・	下泉村庄屋の塩御林番を地元住民に委す	・
宝永2年	1705	久保尾・日吉神社創建 (1709年家宣将軍となる)	郡神 社史
正徳元年	1711	朝鮮使節通行につき助郷、下泉より 33人 出役 (1710年 家継将軍となる)	眉山
享保3~12	1718 ~1727	下泉村 - 10年の内 6年 水防工事 (1716年 吉宗将軍となる)	・
享保13 ~元文2年	1728 ~1737	下泉村 10年間毎年水防工事	・
享保14年	1729	下泉村 前年不作につき 各種子・食糧貸与願	・
・ 15年	1730	下泉村 年貢 4石 4斗 1合、 ^{57石} 銀 103 貫 470 文	・
・ 18年	1733	下泉村 寒干害につき 減免願	・
天文5年	1739	下泉村 寒風害 凍霜害につき 減免許可願	・
寛保元年	1741	下泉村 大水害 翌年改修、経費 44兩 3分	・
延享4年	1747	水川村、2年続きの干害で 年貢拝借願	町史
・ 5年	1748	朝鮮使節通行につき助郷、下泉村より 49人 出役	眉山
寛延3年	1750	3月14日 下泉村霜害のため茶全滅、(全国的に百姓一揆起きる)	・
宝暦6年	1756	下泉村 馬 4 疋	・
・ 7年	1757	下泉村 百姓山 66 枚 百姓林 14 枚	・
明和3年	1766	鵜山七曲り間田計画を示されたの、地名住民反対、(1767年イギリス産業革命起きる)	推野
安永元年	1772	8月2日の台風で川根地方で大量の風倒木発生、(1776年 アメリカ独立宣言)	眉山

ムラのあゆみ その一

出典のうち 町史は中川根町史資料編
郡神社史は榛原郡神社史
勝山は勝山本家古文書、椎野は椎野家改書

年	西暦	ムラの出来事	出典
紀元前 約1000年	(縄文) 晩期	上長尾遺跡 (1951年発掘、土偶、土器、発掘)	町史
貞観15年	873	9月石清水八幡宮を勧請し、下泉八幡神社創建 (中川根で「最古」)(794年平安京に遷都)	郡神社史
仁和元年	885	徳山神社創建 (858年藤原良房、摂政となる)	・
延喜12年	912	12月藤川大井神社 創建 (901年菅原道真失脚) (延喜の荘園整理令発布)	・
天曆3年	949	井堀玄蕃が菅原道真像を捧持して平安京から来り、小嶽天神社を奉斎、創建	・
永久3年	1115	徳山、浅間神社奉斎 (1096年 11/24大地震、近江・伊勢、駿河等被害多し)	・
文和2年	1353	2月25日、今川範氏軍が「徳山城」(本城)を攻略 (1338年、宗良親王、越江、白羽谷に漂着)	町史
明德4年	1393	今川仲秋が、上長尾の支配につき天野氏に対し認める (1392年、南北朝の合戦)	・
応永6年	1399	藤川村の支配を天野氏に委す (応永の乱)	・
長祿3年	1459	上長尾八幡神社創建 (太田道親、江戸城築城)	・
延徳3年	1490	上長尾智満寺開基 (1488年、一向一揆・加賀)	・
永正8年	1511	地名、大井神社創建 (1518年、今川氏親、遠江において検地・今川按地の初見)	郡神社史
・ 18年	1521	水川神社創建	・
天文年間	1530	田野口、津島神社創建 (1526年、今川義元、今川家と続く)	・
元龜年間	1570 ~1573	尾呂久保、白羽之山神社創建 (1568年、武田信玄、駿河を占領)	・
・ 4年	1573	天野・奥山氏、武田に隷属 (武田信玄、三方原で徳川軍を破る)	町史
天正2年	1574	武田氏が奥山氏の上長尾の支配を認める (1575年、長篠の合戦)	・
天正年間	1573 ~1592	下長尾、八幡神社創建 (鷲ヶ岳八幡勧請という)	郡神社史
・ 9年	1581	2月3日、大泉院開基 (徳川家康、遠州高天神城を攻略)	町史
慶長4年	1599	地名外、各村検地 (大岡検地帳) (1590年、金谷、五和、大井川の瀬替之)	椎野 勝山
・ 9年	1604	下泉八幡神社再建 (1600年、関ヶ原の戦い、1603年家康、将軍となる)	郡神社史
元和2年	1616	朝鮮使節通行につき、助郷、下泉村より9人出役 (武家法度、公家法度制定)	勝山
・ 5年	1619	下泉村の年貢 11両1分、準役 真綿300匁	・
・ 9年	1623	久野脇八幡神社創建 (家光将軍となる)	郡神社史
寛永14年	1637	下泉村検地、名請人3人、他は隷属 (島原の乱)	勝山

定期購読のお願い

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 千円 150円

皆様の定期購読がふる里通信の発行を支えます。年間4回(季刊誌)の発行を予定しております。

今回で、購読期間の切れる方に、郵便振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読をお願いします。

年間予約600円のご送金をおすすめしますが、2・3年分のご予約と賜ります。購読期間が切れて半年以上ご連絡が無い場合は勝手ながら中止とさせていただきます。

住所変更のありも是非ご連絡下さい。

※問い合わせ先

TEL 0547-56-0015

小沢 節子

※払込通知票

口座番号 名古屋く77-81556

加入者名 中川根ふる里通信係



数年続いた暖冬は影をひそめ、今冬は本来の寒さだったように思われます。お茶の新芽も美しく出はじめ、入野脇方面では初摘みが始まると聞きます。ゴールデンウィークは、町民にとって、川根茶づくりにはけみならず、厳しい冬に耐えて芽はえの時期をあやまらず、晩霜にもあわす、健やかに伸びたお茶の葉はきとおいしいお茶になるでしょう。

胃腸など

中川根町民に消費されるお茶は、かんにかかる人が全国平均の20%と、非常に少ないのは、お茶を「元年」又「幼少の頃から飲み続けているから」との発音が一時三つありましたね。タニニと言うニガミ、シブミの素が、発がんを抑制する効果があるそうです。しかし、大部分の消費者者はニガミ、シブミを好まないそうで、まろやかな緑色のお茶を好むそうです。もし、かいた川根茶本来の味ではなく作られた味のみ知れば、地元の八重が産するお茶は一番茶も最後

の、棒も入った(茎)又ひろいっぱ(残り芽)としたお茶や、やぶきたなど品種ものでなく、値段の安い在来ものなのです。さんくと日光に当たった芽からはあまりきれいな緑色のお茶はとれないそうです。しかし、私達はこれからは安全性も考えなければなりません。農薬や肥料の事も充分勉強して、安心して消費者の方々に飲んでいただくものです。ニガミ、シブミ、煎いた色、川根茶の特色としてPRするのも、地元で課せられたものです。

川根高校鈴木校長先生に原稿依頼をお願いしていたところ、「このままではかわねはだめになっちゃうよ、かわねを」と、おっしゃいました。言葉が出ませんでした。鈴木先生は、真のかわね人になるにはと川根町民に求められました。郷土愛は、子育て、学校教育、全て環境が関係するものかも知れません。三月、四月、卒業入学、別れ会合の時です。今年もまた、中川根町から百数十人、川根高校卒業生の人々が、転出して行きました。

鈴木先生は、川根でなく、かわねと書いています。見るとかわねは、くおだやかに感じられます。私は、やまがの語を好みます。ひらがなでなく「山香」です。まちは、まがは、好みます。が、遠い昔、山香庄、東子だった歴史を感じ、この季節、木々の新芽、花の香、茶工場からの香、まさに山里は香りで満ちています。

今回号、満洲、戦争の事が多面になり、たのび、四ページが、ついに、どうぞ史実として、お読み下さい。

アカヤシオの写真、カラー紙には載せられませんでしたので、入れさせていただきます。ご覧下さい。